

(十三) 隱口こもりく

紀が歩いている。宮殿の奥深く、たった一人で歩いている。青白い寂しげな顔が、暗闇の中に浮かび上がる。何かを求めるかのように、音もなく歩き回る。

この頃から軽は病の床に就くようになった。どこが悪いということもなく、ただ鬱々として日を過ごす。

「寄るな。」

突然怒鳴って起き上がると、気が狂ったように暴れ出す。

(皇子様の時と同じだ。)

阿閉は胸が潰れる思いで見守っている。だから軽を大王にしたくなかったのだ。阿閉は軽が哀れでならない。軽を苦しめているのは大津だろうか、紀だろうか。阿閉はひたすら仏に祈るばかりである。

「お后様の霊がさまよっておられるそうだ。」

「生まれたばかりの赤子を探しておられるというではないか。」

「お上のご病気は、やはりお后様の祟りたただろうか。」

「この夏は流行り病で死ぬものが多かったな。あれもお后様の祟りなのか。」
「多分な。都は特にひどかったからな。このままだと来年はもつとひどくなるぞ。」

「遷都しなければお上も我らも助からないのではないか。」

飛鳥の夏は蒸し暑い。その、よと 澱んで蒸し蒸しする熱気は、疫病にはもってこいの住処らしい。皆浮き足立っている。遷都が廷臣たちの間で本気で論議されるようになった。

「遷都には費用がかかり過ぎる。大体今の都に移ってからまだ十年ちよつとではないか。民の負担を考えるべきだ。」

不比等は一貫して遷都には反対である。今の都は自分が造ったのだという自負があった。「藤原京」という、氏の名を冠したこの都を捨てるなんてとんでもない。だが、不比等の思惑をよそに、遷都を求める声は高まるばかりである。さすがの不比等も裏で世評を操作している人物がいることには気づいていない。

そうこうするうちにも軽の病は重くなるばかり。

「私はもうだめです。首に位を譲りたいのですが、首はまだ幼すぎます。首が成人するまで母上に天皇になっていただきたいのです。」

「何をおっしゃるのです。病気などすぐに治りますよ。仏に祈りなさいませ。」

それより、お上は本気で首を天皇になさるおつもりですか。首までお父様の

ように早死にさせたいのですか。私は天皇など真つ平ですよ。」

阿閉の祈りも空しく、軽がその生涯を閉じたのは、翌年の暑い夏のさ中である。二十五歳の若さであった。

(夫も死んだ。息子も死んだ。大王などになったばかりに。その器量ではなかったのに。悔しい。可哀想過ぎる。重荷を背負わなければのんびりと長生きできたであろうに。)

阿閉は涙が止まらない。

だが今度も阿閉にはゆっくり泣いて過ごすことは許されない。早く次の大王を決めねば国が乱れる。首親王はまだ七歳。今では浄御原宮大王の皇子も少なくなつた。妃腹で最年長は長親王か。

「長親王がよろしいでしょう。」

いつも表向きは従順な不平等だが、この時ばかりは首を縦に振らない。王位が長に移つてしまつては首の目がなくなる。かと言つて、今、夫人腹の幼い首を推しても誰もついては来ないだろう。ここは菟野が軽に譲つたのと同じ形にしなければならぬ。軽のために強引に作り変えた神話である。これを利用しない手はない。「祖母から孫へ」。この王位継承を実現するには阿閉の即位が欠かせない。

「大行天皇のご遺言です。皇祖母尊すめのおおやのみことには何とぞご即位あそばしますよう。

伏して願ひ上げ奉りまする。」

「私には無理です。」

阿閉は固辞して受けない。

阿閉が本首を言える相手は氷高一人。蟋蟀こおろぎが鳴いている。一晚中鳴いてられる蟋蟀が、いじらしくもあり、羨ましくもある。夏ももう終わろうとしている。

「一旦他の親王へ位が移つてしまつては、夫人腹の首は天皇にはなれません。だから不平等は私をつなぎに置いておきたいだけです。おばあ様と同じように私を利用するつもりなのではないでしょうか、そうはいきませんよ。」

風もない静けさ。燭台の炎が真つ直ぐ立ち上がる。

「では、お母様は首が可愛くはないの。」

氷高は何かを考えている。弓削が死んでから八年。夫を死に追い込んだものの正体を求めて、黙つて世の動きを見つめてきた。

「孫とは言つても、首は不平等と三千代のもので、私のところへは挨拶に来るだけです。可愛がれといつても無理ですよ。」

「では、吉備の子供たちは、どう。」

吉備は膳部王、葛木王、鈎取王と立て続けに三人もの男児を生んだ。子供たちを連れてはせつせと阿閉の宮へ遊びに来る。膳部はもう十歳になった。祖父の高市に似て逞しく育っている。利発な子である。葛木も鈎取もやんちゃ

で可愛い盛り。ひ弱さはない。吉備の意図は見え見えだが、阿閉にとっても良くなっているこの子供たちが、愛しくてならない。

「あの子達のために、不比等に利用されてみるのも、悪くはないと思いませんか。」

思ってもいなかった。この娘は何を考えているのだろうか。母の眼を覗き込む娘の眼の奥に真剣な光が宿っている。

「私にできるだろうか。」

「お母様にしかできないことすわ。」

息子を奪った不比等への怒りが阿閉を決断させた。だが、阿閉は怒りを面に出すことはない。実権を握った驕りだろうか、それとも油断だろうか、あれだけ人の心を読むのにたけた男が、阿閉の怒りに気づいていない。阿閉も菟野と同じように、孫の首の即位を望んでいると思っ込んでいる。

阿閉の承諾に不比等は小躍りして喜んだ。これまで政治に一切口出ししなかった、このおとなしい阿閉なら、自分の意のままに動かすことができる。首が成人した時に、位を譲らせればよい。軽が即位したのは十五歳だから、後八年の辛抱だ。その時、不比等は天皇の祖父として、揺るぎない地位を得るはずである。

阿閉は独り庭に降り立って月を見上げた。十六夜の澄んだ月が池に映えて、池の端の咲き出したばかりの萩の花が白く浮かび上がっている。そう、あれも萩の花が咲き出した頃だった。忘れもしない壬申の乱。近江の宮の奥深く震えながらひたすら戦いの終わるのを待っていた己の姿。あの時から自分は決して他人と争うまいと誓ってきた。自分の気持ちを極力抑えて、ただただ目立たないようにと努めてきた。それなのに。

（私は天皇になる気などなかったのに。）

阿閉の困惑をよそに、即位の準備はどんどん進んでいく。

（私にはお義母様のような強さはない。でももう後には引けない。）

自分で自分に言い聞かせる。

（不比等の企みを抑えるには、私が位を継ぐしかないのだ。）

他の親王では、不比等が承知しない。菟野が即位したのは四十六歳の時だった。阿閉は今年四十七歳。不比等より二歳若い。阿閉はこの二年の差に賭けている。

静けさの中、命のある限り鳴き続ける秋の虫がいじらしい。

（あの小さな蟋蟀でさえ、命ある限り鳴き続けるのだ。阿閉よ。いつまでも逃げていてはならぬ。子や孫のためなら惜しい命ではあるまい。）

賑やかな虫の音と共に、長い長い秋の夜が更けていく。

眠れぬ一夜が明けると、いよいよ即位の大礼が始まる。不安と緊張で体が小刻みに震える。

ますらをの鞆とこの音すなり

もののふの大 臣 楯立つらしも (76)

御名部が阿閉の震える手を取って、力づける。

わご大君物な思ほし

皇神のつぎて賜へるわれ無けなくに (77)

阿閉を支えるのは、姉の御名部と娘の氷高と吉備。石上麻呂と大伴安麻呂は味方とは言え、共に老齢である。いざと言う時に頼りになるのは長屋だけ。兵士は全て太政官に属している。その太政官の実権を握っているのが不比等である。たとえ天皇といえども勝手に兵を動かすことはできない。

「陛下を守る直属の兵士がなくてはなりません。」

長屋の主張で阿閉の即位承諾と引き換えに、授刀舎人寮が設置された。不比等は阿閉から右大臣に任ぜられて油断している。

新しい天皇の登場は、瑞祥で迎えられねばならない。武蔵国秩父郡で銅が産出されたという。瑞祥を賀して新しい年は『和銅』と改元された。続けて懸案だった遷都の詔が発せられ都は騒然とした雰囲気にも包まれていった。

そんな騒ぎの中、『人麻呂』の辞世の歌が都に伝えられた。

鴨山の岩根し枕ける我をかも

知らにと妹が待ちつつあらむ (223)

その謎に満ちた死に、人々は不気味なものを感じた。『人麻呂』の晩年に連れ添った妻も彼の最期に立ち会うことは許されなかったらしい。妻依羅娘子は嘆く。

今日今日とわが待つ君は

石川の貝に交じりてありといはずやも (224)

直の逢ひは逢ひかつましじ

石川に雲立ち渡れ見つつ思はむ (225)

死んだ『人麻呂』に成り代わって、ひそかに、その最期の姿を歌に伝えた者がいる。

荒波に寄り来る玉を枕まくらに置き

われここにありと誰か告げなむ

(226)

「人麻呂」は石見国いづみのくにで海に沈められたらしいという噂が流れた。

(佐留も死んだか。)

三年前にやつと大納言になった安麻呂である。まもなく七十歳にも届こうかという齢になった。一回りも二回りも小さくなって元気がない。

安麻呂の手には、佐留が捕えられる直前に、ひそかに届けてよこした書物がある。『古事記』と上書きされたその書は、浄御原宮大王の意向によって書かれたものだという。

「どう思う、この書。」

旅人は老歌人の生き様に思いを馳せる。

『天神賀詞』あまつかみのよじこは天皇や中臣氏に都合よくできていましたが、この書はど

ちらかと言うと、我々の聞いてきた言い伝えに近いですね。勿論大伴家の伝承とは違うところもありますが。今、右大臣殿が書かしている正史は、もつと右大臣殿に都合よく書かれるでしょう。もし、右大臣殿がこの史書の存在を知れば、当然抹殺しようとなさるでしょう。」

「それよ。恐らく佐留は、この書を守ろうとして殺されたのだろう。」

「私もそう思います。佐留殿に代わって、この書を守っていかねばなりませんな」

「そうだ。頼むぞ。不平等の史書ができた時、この書と比べ合わせて見れば、不平等の狙いをはつきりするだろう。あやつの化けの皮をはがすこともできるかも知れぬ。」

安麻呂は旅人に全てを託している。ただ、この旅人に子のないのが心残りである。

遷都せんとは和銅わどう三年の三月に行われた。山々が柔らかな新緑に煙る中、阿閉の

輿こしがゆっくりと進む。山桜せいせの清楚な花がかすかに甘い香りを放っている。だが、眼を閉じる阿閉の胸の内は今にも降り出しそうな黒雲に覆われている。

阿閉にすれば自ら望んだ遷都ではない。魑魅魍魎ちみもうりょうの跋扈ばっこする都から逃げ出したい。そんな世評に押し切られた格好の遷都である。

藤原宮なら飛鳥の一部ともいえる。大宮からでも飛鳥の山を望み見ることが出来る。だが奈良へ行ってしまつては、もう夫の住んだ島の宮を見ることが出来ないだろう。輿こしに揺られながら過ぎにし方を思い出すと阿閉は涙が止まらない。

飛鳥とぶとりの明日香の里を置いて去いなば

君があたりは見えずかもあらむ

(79)

一方、せっかく造つた藤原京を捨てるのは気が進まなかつた不比等だが、いったん遷都と決まつたからには、これを利用しない手はない。首親王を擁する不比等は、新都を見下ろす東部丘陵を含め、皇居を圧する広大な用地を押さえて、豪壮な邸宅を建設中である。いずれはこの地に莊嚴華麗な神社を建立して、今作っている正史で皇祖神とされる神々を藤原氏の神として祀るのだ。その時こそ藤原氏による実質的な天下の乗っ取りが完成するだろう。

それまでに邪魔物は払われねばならぬ。天神あまつかみも。国神くにのかみも。不比等の見上げる夜空には常に北辰の星が他を睥睨へいげいしている。

(眼の上の瘤こぶだった石頭いしの石上麻呂は、留守官しゆしゆまもりのつかひとして旧都に置いてき

た。昔気質むかしかたぎの大納言大伴安麻呂は目障りだが、跡取りの旅人は五十を過ぎてまだ正五位上の左將軍。しかも子供がないときているから、気にすることは

ない。長屋王ながやのおおきみには、娘を与えて子供もできた。今では娘の館みやに居ついて、

不比等の婿におさまっている。梶犬養氏の妻は安宿媛あすかひめを生んで後宮を抑えて

いるし、鴨氏の妻が生んだ宮子は首親王おびとのみこを生んだ。石川氏の妻は武智麻呂

と房前ふささきと宇合うまかいを生んだ。妹の五百重いおえのいらつめ娘に生ませた麻呂まろも先が楽しみだ。何と

言つても浄御原宮大王の皇子新田部にいしたべの弟だからな。)

何もかもうまくいつている。もう作り笑いでごまかす必要もないというのに、不比等の顔は知らず知らずのうちに綻ほころんでしまつた。

(武智麻呂と房前はもう三十になつたな。まだ従五位下か。もっと上げてや

らねばいかんな。武智麻呂は頭がよい。はかりじと 謀をめぐらすのに向いている。もうしばらく大学頭のままにしておこう。正史の完成も遠いことではあるまい。房前は人の扱いがうまい。人の上に立つことができるだろう。じもんきつし 巡察使としてもっと諸国の様子を見て来た方がいい。宇合と麻呂もそろそろ元服させてやらねば。
不比等の夜はまだまだ忙しい。
（妻も子も多い方がよい。）
不比等は笑いが止まらない。

新しい都の北西、佐紀の地には、皇族や貴族のきらびやかな館が競うように建てられた。秋ともなると色とりどりの紅葉に染まり、一面錦で覆われたような美しさである。深紅に染まった楓を冠にさして、長親王の宮殿を訪れたのは志貴親王。志貴は長にとつて叔父でもあり、従兄でもある。川島と仲の良かった志貴は川島に代わって長を支えてきた。杯を交わしながらも、歌の好きな志貴は溜め息をつく。

「佐留ほどの歌詠みは、もういないでしょうなあ。」

「佐留は確かにうまいが、叔父上の歌は躍動感があつてとても美しい。私は好きですよ。」

「そう言ってくれるのは親王だけですよ。」

「そんなことはありません。皆言っていますよ。」

「それにしても佐留はどうして殺されたのでしょうか。」

「それなのですよ。あの頃捕えられた歌詠みたちは、皆許されましたからね。長は幼い頃から、歌を始めとしているんなことを佐留に教えてもらった。」

「思えばこれまで余りにも多くの人々が、罪もないのに殺されてきた。」

二人は黙って杯を傾けながら物思いにふける。サワサワと音を立てているのは風に揺れる庭のススキ。遠くで鹿が鳴いている。

「人は死んだらどこへ行くのでしょうか。」

「黄泉国へ行くのでしょうか。」

『あまつかみのよじと天神賀詞』では我ら天神の子孫は高天原から天下つて、高天原に戻る

ことになっております。」

「あれは中臣大嶋の作り話です。藤右大臣が若い頃に書いたと言う者もいま

すよ。おおきすめらみこと太政天皇の諱（いみな）は高天原広野姫ですぞ。高天原広野姫の

子孫以外は、高天原には昇れないのでしょうか。」

「そうか。我々邪魔者は黄泉国へ追い払われるわけですか。」

「有り難くないですか。高天原へは行きたくないが、せめて高野原などとい

うのはどうでしょうな。」

「高野原。ははは。こいつは面白い。そこなら皆仲良く暮らせそうだ。」

「いや、それはどうでしょうな。皆女好きの連中ばかりだから、うるさいことになりませうぞ。」

「うるさい。うるさい。そう。こんな歌はどうでしょう。」

秋さらば今も見るごと

妻恋ひに鹿鳴かむ山ぞ高野原の上

(8)

「ははははは。面白い。さぞかしたくさんの鹿が鳴いていることでしょうな。」
志貴の笑い声が湿る。

「実は佐留の歌を集めてみたのです。」

長が机の上から薄い書を取り出す。佐留とやり取りしたものの他に人から聞いたものも書き留めてある。佐留が若い時から詠み集めたものをまとめた歌集も今は長の手元にある。

「そうそう。こんな歌もありましたなあ。いや、もっとあるはずですよ。そ
うだ。もつといるんな人の歌を集めてみたらどうでしょうな。」

「面白いですね。」

「ただ集めるだけでは能がない。罪もなく殺された人々の挽歌ばんかを集めるので
す。」

「鎮魂の歌集ですね。しかし、告発の歌集と見られると、こちらが危ないで
すよ。」

「それもそうですな。適当に殺した方の挽歌も入れておいたほうがいいかも
しれませんな。」

「相聞歌そうもんかや雑歌ざつかも加えましょう。晴れの歌を並べるのです。大王を褒め称えたた
る歌ですよ。それなら誰にも文句は言えません。その裏で人々は恋をし、愛
欲の果てに死んでいくのです。勝った者も負けた者も共に死を免れることは
できません。」

「面白い。正史には書かれないような真実を、歌で綴つづってみようではありません
せんか。」

「正史には書かれないような真実」の歌を整理していると、その裏に潜ん
でいる一人の男の影が見えてくる。影の男に怒りを覚えながらも、どうする
こともできない自分に苛立ちを抑えることのできない志貴である。

(歌の配置を工夫することで、隠れた真実を伝えよう。)

『万葉集』と名づけられたこの二巻の歌集は、後に長の息子長田王ながたのおおきみの手
を経て大伴氏に伝えられることになる。